

アレクサ

2021.4.21

「アレクサ、プライム・ビデオを見せて」自分がまさかこんなセリフをいうとは思わなかった。以前から、テレビの大画面でインターネットが使えるといいなと思っていた。

ある日、帰省した息子が、便利なものがあるとばかりに、我が家のテレビに何かを差し込んで、あっという間にテレビの画面がインターネットになった。「アレクサ、ネットフリックスを見せて」などと話しかけている。

いったい何が起きているのか。傍らの父親は、呆然とするばかりであった。とにかく結論は、我が家のテレビでもインターネットが使えるということだった。一応、息子からその仕組み、システムについての説明を受けた。わかったようなわからないような、これはいつものことである。

大切なことは、息子がテレビに差し込んだものと同じものを購入することである。早速、息子に聞きながら、アマゾンで検索し、注文をした。すると、アマゾン・プライムに入っているおかげで、すぐに届いた。便利すぎる世の中である。後は、マニュアル通りに設定するだけである。こういった場合は、余計なことをせず忠実に作業を進めるのが一番である。過去の経験から学習したことである。

私でもできた。晴れて我が家のテレビはインターネットが使えるようになった。この前まで、「キングダム」を中途半端な大きさのパソコン画面で見ていたのは、何だったのか。知らないということは、大きな損失のような気がしてきた。

息子の説明によると、アレクサでできることはたくさんあるらしい。だが、結局、よくわからないし、使ってもいない。この辺が弱いところ、だめなところだと自覚はしている。きつとなければならぬで済むし、間に合っているという意識があるのだろう。

アレクサとくればAIである。『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』というセンセーショナルなタイトルの本が2018年に世に出た。著者は新井紀子先生である。一般の方からすると、子どもたちが教科書を読めないとは由々しきことだと感じるだろう。だが、教員からすると、「やっぱり」と思う方が多いのではなかろうか。私もそうである。

子どもたちは、ずっと教科書が読めなかったのである。数学ができないのではなく、そもそも問題文の意味がわかっていないなどという話は、だいぶ昔から出ていた。かといって、教科書が読めないのは困る。教科書が読めないのでは話にならないとなるだろう。

ずっと以前から続いてきた問題、教員が感覚的につかんでいた問題を、新井先生が世に出してくれたのである。こうなると、世の中、特に教育界は動き出す。新井先生の専門は、数理論理学である。基礎的・汎用的読解力を分析している。大人の方からすれば、簡単な文章である。しかし、3人に1人が読めないのである。

ということは、野田中学校の生徒の1/3は、教科書が読めないと考えるのが妥当であろう。生徒は苦しんでいるはずである。ずっと困っているであろう。早く救ってあげなければならない。そのための処方箋をこれから出していく。「アレクサ、基礎的・汎用的読解力をつける方法を教えて」さすがにアレクサは、処方箋までは出してはくれない。これは授業を担当する教員の役割である。